

## 東京都の文化施策を語る会（第7回）議事要旨

- 1 日 時 平成17年10月14日（金） 10:00～12:00
- 2 場 所 都庁第一本庁舎25階 115会議室
- 3 出席者 福原座長、今村委員、岡本委員、平田委員、太下専門委員、北川フラム委員

### 4 次 第

- （1）開会
- （2）資料確認
- （3）意見交換

### 5 発言要旨

山本文化振興部長

ただいまより、第7回「東京都の文化施策を語る会」を開催させていただきます。

本日は、お忙しいところをご出席いただきましてありがとうございます。なお、柏木委員はニューヨークに出張のためご欠席となっております。

それでは、今回のゲスト委員をご紹介します。アートフロントギャラリー代表の北川フラム委員でございます。北川委員は、アートディレクターとして、都市・建築計画に多数携わられております。代表的なプログラムには、パブリックアートの世界を築きました「ファーレ立川」、新潟県十日町市を中心として開催されます「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」などがございます。

それでは、これより先は、福原座長に進行をお願いいたします。

福原座長

今日は、北川フラムさんにゲストとしておいでいただきましたので、できるだけいろいろなお話をたくさん伺って、今後の議論の参考にしたいと思っております。

それでは、事務局から資料の説明をお願いします。

文化振興部副参事

（ 資料説明 ）

産業労働局観光部企画課長

（ 資料説明 ）

福原座長

ありがとうございました。一つだけ質問をさせていただきます。写真美術館には、国籍を問わず外国人がたくさん来ます。東京のどこに行きますかと聞くと、1番目が2番目に秋葉原が入っています。こういうものは観光ではないのですか。

産業労働局観光部企画課長

やはり「観光」と捉えておりまして、外国語表記のマップでも、秋葉原等を紹介しているところがございます。

今村委員

上野に行った人が秋葉原に、秋葉原に行ったらそのまま上野に行くというような、そういう面としてのまちづくりが必要だと思います。

産業労働局観光部企画課長

今回、「観光まちづくりサポートプログラム」において、両国地区と墨田地区との区域を越えた取組みの支援を始めたところがございます。

岡本委員

上野と浅草の間には、電柱が地下埋設され、幅の広い見栄えのいい通りがあります。「通り」というのは生活空間であり、途中に合羽橋の道具屋街とか様々な魅力的な観光資源としての素材があるので、それを表現して、観光客の利便性を高めることが重要だろうと思いますし、そういう余地はいくらでもあると感じています。

福原座長

それでは、北川さん、よろしく申し上げます。

北川ゲスト委員（スライドをもとに説明）

お招きいただきありがとうございます。今日は3つの話をさせていただきます。

一つは、私がほとんどの時間を過ごしている代官山のヒルサイドテラスを中心とした活動です。次に、米軍基地跡で行ったパブリックアートのプロジェクトである『ファーレ立川』について。最後に越後妻有について、簡単にお話しさせていただきます。（スライド）代官山で最初にやった展覧会で、川俣正さんの「工事中」というプロジェクトです。実際に工事をしているようなもので、テナントからは大ひんしゅくを買いましたが、川俣さんのデビューとなった展覧会です。

（スライド）今年、「日本におけるドイツ年」のデザイン部門の企画を、1年間、ヒルサイドテラスでやっています。ドイツというのは、デザインを飾りとは全く考えて

いない。デザインを企業戦略そのものもととしている。日本では、まだデザインを装飾だと思っていますから、ドイツから学び、特に企業の人たちにデザインというものをちゃんとわかってもらおうと思っています。

(スライド) 同時に、代官山での地域活動として、いろいろな方をお呼びして、例えば将来の地域通貨なども見据えた勉強会を続けています。

(スライド) これなどは、東急バスの運転席上のモニターに、代官山で歩いている犬を収録して、犬の名鑑をつくり、映像を流しました。自慢気に犬を散歩させている人が結構いますが、その人がパトロール役になってマナーがよくなりました。

(スライド) 今の旧朝倉邸のほかにJR跡地が住宅ゾーンとなっており、全体的な都市計画として、渋谷区、東京都、目黒区と話をしています。

これに関して、例えばニュータウンに住んでいるお母さんや子どもは地域に入っていますが、寝に帰る勤めの人、そこの住民と言えるのかという問題があります。私も、住んでいるのは恵比寿ですが、時間の多くをここ、代官山で費やしています。この第二住民制度とでも言うか、選挙民がいるということだけで、それが世論をつくることに関して、基本的な間違いだと思っています。私の選挙権は恵比寿にありますが、地域の活動は代官山でやっている。これは、多くの人を感じている問題だと思います。

(スライド) 次にファール立川ですが、ここは米軍基地跡で、1977年に返還し、国及び東京都と立川市のいろいろな考え方の中で、業務核都市構想ができました。この中で、とにかくパブリックアートを導入するということです。

(スライド) 米軍基地跡のまちですが、地域と人、あるいは、人と人を媒介するアートをやろうと、パブリックアートの概念を思い切って変えました。とにかく、触ったり、座ったりできるように徹底的にやって、回遊性を持とうと。

今まで、パブリックアートというものはデザイン的な処理、つまり、おおむね反対を受けないもので、デザインの一環みたいな選ばれ方をした。その結果、パブリックアートは金太郎飴みたいになった。けれども、いろいろな平均値よりも、これは好き、これは嫌い、ということがたくさんあってもいいのではないか。そうした多様性をまちの中に埋め込みたいと思っていました。

(スライド) 阪神・淡路大震災のすぐ後にNHKで放映されました。仮設住宅にいる人たちから、『今度やるときは、私たちのまちをこういうふうにやってくれ』という

電話がNHKにかかってきたそうです。これが文化の本質を伝えている。贅沢品とは思っていないわけです。

(スライド)これは、目の悪い方たちが楽しめるように、等間隔で、等身大の、いろいろなタイプの作品を設置しました。さわる彫刻展というのは、私たちにとっても同じことですが、五感をどう解放していくかということです。

(スライド)これはなかなかいい話ですが、ファーレクラブというボランティアグループができました。11年目にして、立川市、住民、商工会議所が、ファーレ立川の清掃などのメンテナンスをお金を出し合って続けるというものです。これは恐らく世界的にも珍しい動きです。小・中・高の学生は相当来ています。立川市は、美術館はもうつくらない、まち全体が美術館というコンセプトに変えました。

(スライド)何年後か私に話がありまして、国際芸術祭をやりました。欧米にあるピクニックと日本の運動会を重ね合わせました。立川の町内を6つに分けて、5大陸の在日の人たちと、一緒に作業をするものです。カーニバルや音楽など、みんながいろいろな形で参加して、地区ぐるみでやりました。

つまり、美術ということが、展覧会で終わるだけではなくて、みんながどう関わっていくかを含めたものになっている。これが私が考える地区のモデルです。

(スライド)次に、越後妻有という過疎地の話です。新潟の外れで、人口3万人以上が住んでいる場所では世界一の豪雪地です。近代化の中で、あるいは、教育上も、若い人たちが都市に出るのは仕方がなかったわけですが、日本が農業を国策とすることを止めたことにより、1,500年間、農業を通して大地とかかわってきたアイデンティティを失ったわけです。

なおかつ、ここは高齢化人口が40%を超えています。つまり、現在の価値基準で言うと効率の悪い地域です。

(スライド)一番厳しそうな十日町地域だけがこの活動をやって、新潟県のほかの地域は、都市的なプログラムのために崩壊しました。

那智の滝あるいは金比羅さんでもいいのですが、普段はドア・ツー・ドアでなければ嫌だと言っているこの地域のお年寄りが、金比羅さんの階段を1000段上がる。それは何かというと、自分の五感を通して、歩く、疲れる、見る、感じるを含めた行為が自分に返ってくるからです。

762平方キロという東京23区よりちょっと広い地域で、徹底的に歩いてもらう。蒸し暑い、案内が悪い、大変だと言いながら、皆さんがリピーターになって通い出したのが越後妻有の大地の芸術祭です。効率化といったものから徹底的に離れるということであり、アートを使いながら、まちづくりのきっかけをつくろうということです。

(スライド)この地域は、平らな土地がほとんどありません。今から十数年前は、お年寄りの自殺率が日本でトップの地域です。なぜかという、田んぼにかけたエネルギーがよその地域よりも強かったため、農業が捨てられたことに対して、どうしていいかわからない。コミュニティがあり、田畑や家はあるけれど、住んでいる人がいなくなる。人がいなくなったらコミュニティが成立しない。それは止めないとまずい。

一方で、丸の内に通っている人やニュータウンに帰る人が、相当ここで手伝っています。それは、妻有の人が私たちが必要としている以上に、もしかしたら、都市の人間がこういう地域を必要としていたのではないのかということです。

(スライド)それを、アートを使いながら、このまちをもう一度、半定住から定住に変えていく可能性をさぐりたいと思っていました。

この中で重要なのは、他者の土地にアートをつくろうとすることです。当然、みんな反対します。しかし、そこでのコミュニケーションがまちをつくりだすこととなり、アートはその力を持っていると思います。

(スライド)福島さんという人は、この棚田をやめる予定でした。だったら、作品展示のために貸してくださいとお願いしましたが拒否された。だけど、カバコフがああ詩を書くに当たって、日本の農業の翻訳をするなど、実によく消化した。福島さんも、棚田を続けてきたという敬意をうけることによって、今でも田んぼを続けています。

つまり、ここでやろうとしたことは、通信や市場、あるいは社会システムまでも均質化され管理可能な効率化に向かうなかで、空間自体も、そこに流れている時間の意味を取り外されていく。だけど、そういう中で、固有の土地に残っている時間だけが、もしかしたら、今の世の中の動きに対してよりどころになるのではないか。

今、妻有でやられていることは、固有の場所に流れている時間の再構成というか、それをもう一度思い出すことに、アーティストたちはシフトしている気がしています。さらに、妻有地域の人たちだけではだめで、世代、地域、ジャンルを越えた協働、つまり都市とのキャッチボールが重要だと感じています。

福原座長

ありがとうございました。日ごろ、北川さんのお仕事には敬意を払っておりますが、何よりもプロデュースの力とオルガナイズする力は、余人をもって変え難いところがあって、それが地域を生かす大きな力になっていることがよくわかりました。

岡本委員

非常に勉強させていただきました。前回、知事との懇談会の中で、地域の景観というのは地域の文化の表象だという趣旨の話をさせていただきましたが、まさにそうだと思います。そして、地域の文化を表現する、「地域と人」とおっしゃいましたが、都市からの人も含めて、地域と人をつなぐという意味で、文化、アートの力はものすごいという感じを受けました。

今はウォーキング・フォー・プレジャーの時代で、しかも、観光というのは「見る」ということではなくて五感で対象を享受する。そういう意味では、代官山は大変すばらしい観光目的地になっていると思います。それぞれの個性を持って、秋葉原には秋葉原の表情があって、それぞれの地域の観光が楽しめるということです。

昨日、TRONの発明者である東大の坂村先生のご尽力によるICタグの実験が上野公園で始まりました。例えば、象舎の前に行ってICタグにかざすと、園長さんの説明から象の泣き声、そして歴史まで、大変な情報量が入っている。植物のところに行けば、この植物はこういうもので、今はこういう状態で、最初の芽吹きの状態はこうだということが画像で出てくる。ですから、通りを歩くときに、ICタグにさわっただけでそういう情報が取れるような、観光客、客人に対する対象享受の利便性を、現代の科学技術の力で高めることが観光振興につながるのではないかと思います。

平田委員

北川さんの実践は、大変すばらしいと思っています。ただ、今日は成果を見せていただいたのですが、途中は本当に大変だったろうなと思います。行政との軋轢とか、お話しいただける範囲でお願いします。

北川ゲスト委員

大変でした。4年半で2,000回の説明会をやって、それでもオーソライズされませんでした。でも、それで何かが進んだということではなくて、とにかく村祭りもできなくなった集落が、よそから人が来て、少しできそうな気分になったという感じです。

福原座長

妻有の総来訪者の中で、外国人の比率はどのくらいですか。

北川ゲスト委員

まだ少ないですが、右肩上がりで上がっていると思います。ただ、フィンランドがハウスをつくり、フランスからはパレ・ド・トーキョーが関わり、オーストラリアもキュレーターその他を出向させています。

平田委員

利賀村も全く同じで、最初は、村の議会は反対したのですが、今は、演劇がないとあそこの村は成り立たないと。市町村合併で村ではなくなりましたけど。

私自身も民間ですっとやってきましたから、学生に教えるのは、日本の場合は行政が動かないので、とにかく最初は自腹でやってリスクを背負わないとしようがない。ほかの地域の成功例をキャリアとして認めてくれる社会になればいいのですが、北川さんほどいろいろなところで成功していても、新しい地域に行くとまた障害があるというのが日本の実情です。私たちはいつもその壁に苦しんでいます。

今村委員

この「文化施策を語る会」でも話しているのは、イギリスではアームズ・レングスと言われているんですが、行政がどのように関与をして、東京都は一体何をすればいいのかということです。例えば広域の、新潟県が持っている役割と、実際の事業が行われている十日町であるとか、松代の行政の関わりはいかがですか。

北川ゲスト委員

まず美術館一般についての話です。もちろん、美術館でしかやれないことがあることは承知していますが、今、美術館からアーティストが外に出てきている。なぜ外に出てきたかということ、20世紀の理想だったホワイトキューブは、どの作品も、どこでも同じように見られることが理想だったわけです。それが今、物質的世界になったときに、何の理想でもなくなって管理空間になってしまった。その時に、固有の時間が流れている場所に行くしかなかったことの事情を徹底的に追わないといけない。

次に、優秀な行政が関わっているいろいろやってくれたらありがたいと思うけれども、メディエーター部分は絶対にできません。つまり、それは仕事ではできない。何十年と、美術なり芝居なり、そういうことの中で、それを一日中考えている人でなければ、

アーティストと場所は絶対につなげません。それをフォローすることはできるけれども、それをやろうとすることは無理です。

つまり、アートは、画一化・均質化され、管理されることに対して違うと言っているのだから、行政とは本来なかなか合うものではない。ただ、美術とか文学などというのは、いじめられている中で育つから、そんなことは、別になくてもいいんです。あったほうがいいけれども、なくともいいというつもりでやる。ありがたいけれども、それを行政に期待してはだめだと思っています。

岡本委員

十日町の場合、観光振興に結びつくかどうかのポイントになるのが、ボランティアのガイドのような気がします。その人たちがいるかどうかで話がまるっきり違うと思いますので、そのあたりはいかがですか。

北川ゲスト委員

松代町では、ガイドをするという人たちが12人集まりました。八十幾つの方もいる。ただ、それまで支えたのは、首都圏の学生を中心とした『こへび隊』というグループです。今は、元会社員でバリバリだった人が東京から通っています。

太下専門委員

「大地の芸術祭」のように、アートを活用したイベントというものは、アートにそれほど関心がない方に、いかに関心を持っていただくかが大きなポイントであり、その部分に行政が絡む意味があるのではないか。

「大地の芸術祭」の上手だと感じた点は、作品を、また写真に撮って二次的なメディアになっても、ちょっと面白そうだな、実際に現場に行ってみたいなと思わせるものばかりだった点。つまり、「アートだから」「実際に来て体験しないとわからない」とか、能書きがあって、作品のコンセプトを理解しないとダメということではなく、普通の人たちに対するいろいろなフックが大地の芸術祭には多数用意されていたと思っています。

岡本委員

先ほど、代官山の街並みの話がありましたが、東京で何とか大事にして残したい景観百選とか五十選とか、そういうようなことは、将来に対して意味があると思います。

北川ゲスト委員

小石川や江戸川とか、昔のお屋敷のいいものは結構残っています。ただ、この活用も、今はお茶会ぐらいしかない。もう少し大胆に踏み込んでもいいかなと思います。

今村委員

今、アートやアーティストの役割がすごく重要になってきています。例えば都市計画を新しくする場合、まずその地域にアーティストを送り込む。アーティストが地域住民といろいろなプロジェクトをやっていくうちに、様々な事象が浮かび上がり、面白いコミュニティが出来上がってきたりする。今度は、それをヘルプするために、建築家なり都市計画家を送り込む、という方法です。

ロンドンでも、市の再開発で、公園を実験場として設定しています。そこでアートの実験的なプロジェクトをやり、そこから生まれてきたものを、いろいろなところにフィードバックできないかということをやっている。袋小路に入ってしまったら、決められた手順でしかできないところに、アートという領域をつくることによって、様々な提案や地域とのかかわりが生まれてくる。実は、そのプログラムをやっている人が、昨年末にワンダーサイトに来てくれて、アーティストと一緒に代々木公園でプロジェクトをやったこともありました。

今日は「観光」がテーマですが、単に、観光だから文化的なイベントをやるということではなくて、まちづくりと観光資源や文化が一体に動く必要がある。横浜などは、そういう文化・観光・都市の推進室を中田市長がおつくりになった。私も、この「語る会」を通して、ぜひ東京でも、局の横断的な推進室をつくり、パイロットプロジェクトをメディエーターと一緒にやってやる仕組みができればいいと思います。

北川ゲスト委員

アメリカのニューヨーク市には、コミュニティデザイナー制度があって、ピーター・ウォーカーのような若くて優秀な人がなっている。コミュニティに入って、こうしたらいい、ああしたらいいといろいろな話をする。市も、コミュニティデザイナーが言ったことはわりと受けます。最低限の生活が保障されるだけです。これが公共が持てる機能だと思います。

フランスの場合は、制度としてメディエーターみたいなことをやっています。例えば、あるまちでこういうことをやりたいというときに、メディエーターを送り込む。そしてその人の考えで、自分はこういうアーティストを使ったほうがいいとしてやる。

メディエーターに権限を持たせ、コーディネートするわけです。

太下専門委員

例えば、ヨーロッパなどの都市での観光の経験から東京を見た場合、全然違うと感じる点があります。例えば、ヨーロッパの都市であれば、小さい道もすべて名前がついています。情報さえ間違いなく、地図を持っていれば確実に目的地にたどり着けます。ただ、東京で目的地にたどり着くことは、特に海外からの観光客にとっては難しいのではないかと思います。

そのソリューションの一つとして、日本はテクノロジーも高いわけですから、岡本委員のお話のように、ICなどを使えばいいと思います。極論ですが、外国人の旅行者で、希望する方全員に携帯端末を渡してもいいのではないのでしょうか。ナビがある携帯で、ICなどと連動した情報提供システムです。年間で三百何十万人来ているということは、1日で割ると1万人です。全員が必要とするわけでもないでしょうから、1千台の携帯の在庫の提供があれば、相当面白い実験ができるのではないのでしょうか。地域情報の提供やナビゲーション、あるいは他言語の通訳など、ダイナミックな方向が考えられます。

岡本委員

観光振興の基本原理は、「知らせて、見せて、また来たいと思わせる」ことです。まず、知らせることが大事ですが、さらに、利便化の一つとして、パッケージすることも考える。前回、座長から、パリで美術館をめぐるツアーのお話がありました。あれは、我々の世界では、SIT (special interest tour) と言います。自分が関心のあること、例えばアニメの同好者が、アニメのメッカのような秋葉原に行って、それからジブリの美術館に行くといったパッケージをすることです。これなどは、我々の分野では産業観光といいますが、いろいろな関心に対応するパッケージを、東京には観光財団という組織もあるわけですから、そこで取りそろえて、世界へ送り出すということをするればいいと思います。

福原座長

予定の時間になりましたので、この辺で終わらせていただきたいと思います。

それでは、事務局にお返しします。

山本文化振興部長

これで、第7回の文化施策を語る会を終了させていただきます。本日は、ありがとうございました。